

担当：八戸市、札幌市

参加者数：29名

内容：

- ・文化芸術創造都市推進事業について
- ・創造都市取り組み事例紹介（札幌市、鶴岡市）
- ・文化プログラムについて（文化庁、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会）
- ・意見交換等

5) 関西ブロック分科会

日程：2017年3月9日（木）

担当：篠山市

会場：京都芸術センター（京都府京都市）

参加者数：23名

内容：

- ・文化政策と創造都市の推進及び文化プログラムの展開について（文化庁 長官官房政策課文化プログラム推進室）
- ・取組事例紹介（姫路市、草津市）
- ・CCNJ 発足の経緯と活動について（CCNJ 顧問 佐々木雅幸 氏）

(6) 平成 28 年度クリエイティブ cafe （主催：文化庁文化芸術創造都市振興室）

1) コンセプト

関西でまちづくり、文化や産業などの様々な分野で、悩みを抱えながら、現場で日々奮闘している人たちが集まり、自由に語り、聴くことを丁寧に積み重ね、新たな創造へつなげるプラットフォームを形成し、課題の解決を目指すものとした。

2) 期待される成果と目標

市民、行政・NPO、学生等多様な立場で文化、芸術、産業等にかかわる“人”と“人”とが交流し、対等な立場で議論することにより、創造的な課題解決のできるアイデアの醸成と人材の育成につなげることを成果目標とした。

開催テーマ：今年度は、文化庁移転に関わる政策の探求とともに、文化振興に取り組まれている団体や自治体との連携企画とした。

第14回「これからの文化政策～劇場文化をつくる～」

日程：2016年5月16日（月）

会場：ロームシアター京都

ゲスト：平竹耕三氏（京都市文化芸術政策監、ロームシアター京都館長）

対談者：佐々木雅幸氏（文化庁文化芸術創造都市振興室長）

共催：京都市、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

協力：公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

参加者数：72名

内容：

1960年に開館した京都会館は、多くの市民に利用されてきたが、施設の老朽化が進み、2016年1月、新たに「ロー

ムシアター京都」としてリニューアルした。京都は芸術文化と生活文化が密接な関係にあり、生活の中に芸術が根ざしている。ロームシアター京都は、京都の文化的土壌に根差した世界オンリーワンの劇場として、世界水準の公演鑑賞から市民発表の場まで担えることを目指している。

これからの文化政策を考える時に、文化政策は何のためにするかということ、意義について再確認し、ある種の合意が必要である。そして、京都には土地の力、洗練しブランド化する力、長く続ける力があり、地域の資源を知って様々なことに活かすのが大事である。文化政策で、教育や産業の活性化、そして、観光への活用といった取組を持続的に続けることで、地域の活性化を目指していく。

第15回「文化庁移転とこれからの文化政策」

日程：2016年7月21日（木）

会場：京都府立大学稲盛記念会館

ゲスト：宗田好史氏（京都府立大学副学長・和食文化研究センター長）

佐野真由子氏（国際日本文化研究センター准教授）

コーディネーター：佐々木雅幸氏（文化庁文化芸術創造都市振興室長）

共催：京都府立大学京都政策研究センター

参加者数：63名

内容：

景観、文化、観光の3つの分野を柱とした京都創生の取組は景観政策、町家の保全や観光施策の検討、文化行政にまで及ぶものであり、京都が蓄積したモデル、都市再生のモデルを全国に普及するというのが大きな課題である。文化庁が京都に移転して京都が何をしてきたかということのを正しく理解することで、日本の文化政策、日本の地方が元気になる。

京都の特徴は、まちの規模が絶妙に小さいことであり、ネットワーク間、人々の関係が高まっていく感じをみんなにリアルに感じさせるサイズである。文化庁移転というのは明治以来の国の形を変える日本の歴史として50年度、100年後に見たとき、あの時は転換点だったとなっていくと思う。京都の総合文化政策を吸い取って、文化政策が図々しく他の領域に手を出し、都市政策、建築・景観の問題にも関わってほしい。

新しい文化政策を京都から全国、あるいは世界へ向けて展開するために、京都創生で成果が挙がっているようなモデルの普遍的な展開を考え、全国にたくさんの文化政策の専門家を育てる研究機能を持った文化政策研究所を作るべきである。

第16回「創造的過疎への挑戦」

日程：2016年11月20日（日）

会場：劇場寄井座

ゲスト：大南信也氏（NPO 法人グリーンバレー理事長）

対談者：佐々木雅幸氏（文化庁文化芸術創造都市振興室長）

共催：NPO 法人グリーンバレー

参加者数 37名

アートを通じて創造的な人材が集まり、集まった人がまた変化を作っていくだろうと活動してきた。

働き方を変えていくのは日本が取り組まないといけない一番重要な課題である。神山にできたカフェ・レストランに集まる人たちと話すと、日本がこれからどういう方向に向いていくか、生活の仕方や暮らしかたがどうなっていくかなど、未来を見ることができる。水面下で、がらっと構造を変えるような力強い動きが広がってきていて、表面化したときには大きな流れになる。

魅力的な生き方をする人たちが集まる地域であれば従来と異なる循環が生まれる。世の中に大きな変動が起きる時は中心からは起きず、社会の周辺から起きる。創造的過疎における生き方革命という流れが強まるかどうかには日本の将来がかかっている。

第17回「もっと楽しもう 食と町なみ」

日程：2017年1月21日（土）

会場：伊根町コミュニティーセンターほっと館

ゲスト：金野幸雄氏（一般社団法人ノオト 代表理事）

向井久仁子氏（向井酒造株式会社 杜氏）

コーディネーター：佐々木雅幸氏（文化庁文化芸術創造都市振興室長）

共催：京都府立大学京都政策研究センター

協力：伊根町

参加者数：30名

歴史的資源を活用した観光まちづくりというのがトレンドになり、文化財や歴史文化、芸術文化で日本を作っていくという方向に大きく変わろうとしている。地域の歴史文化資産であり土地の文化を感じさせる器である空き家をうまく活用すれば、UターンやIターンが結果的についてきて、そこに雇用が発生するし、さらには小さな産業が生まれるということが起きている。

酒蔵は地域や色々な方に助けてもらっていて、つながりというのがとても大事である。伊根の外から入ってきた人の中に食の安全を大切にしている方がいて教わるが多かった。伊根には山も海もあり、スキーやシーカヤックで遊ぶこともできる。最近では生活を楽しむ人が増え、自分のまちが大好きという感じになってきた。新たな試みに取り組む人も増えていて応援したい。

変わった人たちが入ってきた時に、その人たちの追いつかないというのが大事で、むしろ一緒に何かやってしまうというところが世界でも成功している。政府が言う「働き方改革」「暮らし方改革」というのは都会ではなかなかできない。こういう自然豊かな環境が重要な要素になっている。そしてクリエイティブな面でどのような新しい流れが出てくるかである。

第18回「新・文化庁へ向けて」

日程：2017年3月9日（木）

会場：京都芸術センター

ゲスト：赤坂憲雄氏（学習院大学教授・福島県立博物館館長）

対談者：佐々木雅幸氏（文化庁文化芸術創造都市振興室長）

参加者数：74名

京都が文化の都として日本の地域社会や地域の文化を庇護するような役割をきちんと演じたら、日本文化は大きくいい方向に変わる可能性がある。東京と京都が楕円の二つの焦点のようになり、その力関係で伸びたり縮んだりしたら、色々な動きが始まる。

新たな文化芸術の領域で、東北の被災地に何を支援ができるか。従来の枠を超え新しい芸術文化の役割を広げるといったようなことがあって始めて全国が祝福してくれるということ、京都の人たちがどれだけ自覚できるかというのが大事である。